

氏 名	金城 忍
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第 23 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	初期看護実習における看護技術の経験時と経験後のリフレクシ ョンの様相および様相間のつながりの特徴
論文審査委員	主査 教授 嘉手苺 英子 副査 教授 大湾 明美 副査 教授 川崎 道子 副査 教授 神里 みどり 副査 特任教授 永島 すえみ

博士論文要旨

保健看護学専攻 保健看護管理・教育領域	学籍番号 331003 氏 名 金城忍
論文題目	初期看護実習における看護技術の経験時と経験後の リフレクションの様相および様相間のつながりの特徴
<p>【背景】 看護学生は看護技術の修得に向けて学内演習で練習を重ね、臨地実習で対象の状況に合わせて看護技術を実施する経験を重ねていく。その経験の意味を付与、拡充していく経験をリフレクションしていくことが看護技術修得につながる。リフレクションは経験の中と経験の後に行われており、双方のリフレクションについては重要性が指摘されているが、取り上げた研究は見当たらない。そこで看護学生は、臨地実習で看護技術の経験時と経験後にどのようなリフレクションを行い、それらのつながりの特徴を迫することは、看護技術教育への示唆が得られると考えた。</p> <p>【研究目的】 看護学生が初めて患者を受け持ち、看護過程を展開する初期看護実習で、受持患者へ看護技術を実施していく経験時と経験後のリフレクションの様相および様相間のつながりの特徴を明らかにする。</p> <p>【方法】 ・研究デザイン：質的記述的研究、薄井の学的方法論に基づきデータ収集、分析を行った。 ・理論的前提および概念枠組み：理論的前提は、リフレクションについては省察的実践モデル(Schon, 1983)、看護および看護技術については科学的看護論(薄井, 1997)を据えた。 ・研究方法：研究対象者は、初めて患者を受持ち、看護過程を展開する初期看護実習を終了した学士課程2年次の看護学生である。その中から研究協力者が、受持患者へ看護技術を実施した経験の中で捉えた状況とその状況に対してどのように考え、どのように行動したのか、さらに、看護技術を経験した後に考えたことについて半構成的面接を行い、聞き取った内容をデータとした。データに基づき、看護技術を経験している過程、経験した後の過程を時間軸に沿って再構成した。再構成された場面から、研究協力者がリフレクションを生じている事象を局面として区切り、「局面の中のリフレクションの様相」を導き出した。その後、経験の中の状況から帰納的に導き出された看護技術展開の段階毎に区切り、各段階での共通性と相異性を比較検討し、カテゴリー化した。同様に、経験した後の過程も局面として区切り、「局面の中のリフレクションの様相」を導き出し、共通性と相異性を比較検討し、カテゴリー化した。続いて、「経験時のリフレクションの様相」と「経験後のリフレクションの様相」のつながりの共通性と相異性を比較検討し、つながりの特徴を導き出した。本研究は、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号：18009)。</p> <p>【結果】 1. 研究協力者概要、および経験した看護技術の概要 研究協力者は18名であった。経験した看護技術は13種類で、再構成した39場面のうち、シャワー浴介助などの清潔への援助技術が27場面と最も多く、その他、車椅子移乗介助や歩行介助、バイタルサイン測定やコミュニケーション技術などがあった。</p>	

2. 経験時のリフレクションについて

「経験時のリフレクション」は182局面であった。帰納的に導き出された看護技術展開の段階毎に区分した結果、「必要性の判断」は20局面、「準備」は36局面、「実施」は102局面、「片付け・報告・評価」は24局面であった。

各局面から導き出した「局面の中のリフレクションの様相」の共通性と相異性を比較検討、カテゴリー化した結果、「必要性の判断」では、大カテゴリーとして【対象者の不健康なありようの把握】など3つの大カテゴリーが導き出され、それらには8つの中カテゴリー、14の小カテゴリーが含まれていた。「準備」では【学内演習での学びや過去の経験や他者の関わりの想起】など4つの大カテゴリーが導き出され、それらには20の中カテゴリー、28の小カテゴリーが含まれていた。「実施」では【看護者の言動から、その意図への関心】や【感情が揺さぶられながらの取り組み】など、9つの大カテゴリーが導き出され、それらには29の中カテゴリー、40の小カテゴリーが含まれていた。「片付け・評価・報告」では、【対象者の反応への関心】など5つの大カテゴリーが導き出され、それらには13の中カテゴリー、16の小カテゴリーが含まれていた。

3. 経験後のリフレクションについて

「経験後のリフレクション」は65局面であり、【ケア実施後の感性的なリフレクション】や【対象の条件を見抜きながら、基本技術を応用し、対象へ適用していく上でのポイントに関連したリフレクション】など6つの大カテゴリーが導き出され、その大カテゴリーには13の中カテゴリー、16の小カテゴリーが含まれていた。

4. 「経験時のリフレクションの様相」と「経験後のリフレクションの様相」のつながりの特徴について

「経験後のリフレクション」は37場面であった。それら場面のつながりの特徴を検討した結果、『経験時に行動のポイントや対象者の反応などをリフレクションしながら実施したが、他者の言動から感情の乱れが生じ、経験後のリフレクションで、経験時のリフレクションの内容や行動の結果を評価するリフレクションが生じる』など、7つの特徴が導き出された。

【結論】

経験時のリフレクションの様相の「必要性の判断」では、不健康なありようを把握する、臨床の予定など、「準備」では、学内演習での学びやこれまでの経験を想起したりしながらリフレクションを生じていた。「実施」では、自身が実施していく中で、「片付け・報告・評価」では、対象者の反応などでリフレクションを生じていた。経験後のリフレクションの様相では、感性的なリフレクションや、看護技術を評価していく中でのリフレクションを生じており、経験時のリフレクションと経験後のリフレクションの様相のつながりの特徴では、経験時には行動のポイントなどのリフレクションを行っていく中で、感情の乱れが生じたりし、経験後のリフレクションでは、経験時のリフレクションの内容や行動の結果を評価するリフレクションなどの特徴が明らかとなった。

そこで看護技術の修得を促す上で教員は、学生が臨地実習で看護技術を体験しているときのリフレクションの状況に関心を向け、その状況を語らせていくことで、リフレクションの特徴を把握していく。さらに実習に先立つ学内演習では、看護技術の安全、安楽、自立、直接目的に照らしたポイントと意味を押さえながら、対象者へ実施するイメージを抱かせると同時に、個人、グループ、クラス単位のリフレクション能力の育成に努めることが、実習でのリフレクションの活用が可能となり得ることが示唆された。

博士論文審査結果等の要旨

博士論文申請者	金城 忍
博士論文審査結果の要旨（3000字以内）	
<p>本論文は、初期看護実習における看護学生の看護技術の経験時と経験後のリフレクションの様相、および様相間のつながりの特徴を明らかにしたものである。</p> <p>実践をリフレクションすることの意義については、様々な分野で強調されており、看護教育においても授業や実習におけるリフレクションに関する研究が行われてきている。本論文は、看護学生が看護技術を学内で演習を通して学んだ後に、実践現場で初めて看護の対象者に学内で学んだ看護技術を適用する段階でのリフレクションの様相を取り上げたものである。看護技術を修得するうえで実践での経験は不可欠であるが、その時に体験にとどまらずいかに経験をリフレクションするかが修得を促すことはこれまで指摘されている。看護学教育の研究の中で看護技術の修得過程におけるリフレクションについての研究があり、行動だけでは把握できないリフレクションの多様性も明らかにされてきている。本研究では、看護技術の経験時と経験後のリフレクションの両方に注目し、それぞれのリフレクションの様相と、2つの様相間のつながりの特徴を明らかにしたところに研究としての独創性がある。</p> <p>リフレクションは人間の認識内部での活動であることから、それを研究対象とする場合、データの収集方法が課題となる。目的に沿った意味のあるデータを把握するためには、そのデータを有し、研究者に語ることのできる研究協力者の確保が不可欠である。特に本研究では看護学生の初期看護実習時の体験であることから、意味あるデータの収集ができるよう、研究者自身が教育者として対象とした学生の中から研究協力者を募る方法を選択している。そのため、研究者と研究協力者が教員と学生という関係の中でいかに倫理的配慮を確保するかの検討を、文献検討を含め丁寧に行ない、倫理審査委員会の承認を得ている。教員が自身の教育実践の対象者である学生を研究協力者とする研究についての道筋をつけた点も評価するものである。</p> <p>分析方法は、研究協力者へのインタビューの逐語録から意味あるまとまり毎に局面を取り出し、局面の意味内容をくみ取り、順次丁寧に抽象化していく方法を選択している。そのため、詳細な内容が浮き彫りにされたが、全体を俯瞰しまとめていく段階で形式的な類別の傾向を残しており、データの持つ豊かな内容を反映した結論には至るには、あとひと段階の飛躍が必要である。しかし、データを詳細に読み込んで明らかにした学生のリフレクションの様相は、申請者の丁寧な分析から生じており、新たな知見を見出している。</p> <p>分析により得られた結果は以下のとおりである。まず、経験時のリフレクションの様相として、182局面を看護技術の展開の段階、すなわち、必要性の判断、準備、実施、片付け・評価・報告ごとにリフレクションの様相を取り出し、「必要性の判断」では、【対象者の不健康なありようの把握】など3つのカテゴリー、「準備」では【学内演習での学びや過去の経験や他者の関わりの想起】など4つのカテゴリー、「実施」では【看護者の言動から、その</p>	

意図への関心】や【感情が揺さぶられながらの取り組み】など9つのカテゴリー、「片付け・評価・報告」では、【対象者の反応への関心】など5つのカテゴリーを導き出している。その結果から、学生はケアの必要性の判断から評価までの間に、技術のポイントや患者の反応、看護者の言動とその意味など、様々な問いかけにより多様なリフレクションをしていることがわかった。また、経験後のリフレクションの65局面から、【ケア実施後の感性的なリフレクション】【対象の条件を見抜きながら、基本技術を応用し、対象へ適用していく上でのポイントに関連したリフレクション】など6つのカテゴリーを導き出している。経験時と経験後のリフレクションの様相のつながりからは、『経験時に行動のポイントや対象者の反応などをリフレクションしながら実施したが、他者の言動から感情の乱れが生じ、経験後のリフレクションで、経験時のリフレクションの内容や行動の結果を評価するリフレクションが生じる』など、7つの特徴を導き出している。さらに、経験時に体験した感情の乱れや疑問などが学生自身の中でとどまり、指導者に表出していないことも明らかとなった。

これらの結果から、看護技術の修得を促すための教育上の示唆として、教員は学生が臨地実習で看護技術を経験している時や経験後に、常に学生が考えていることや思いに関心を向け、その内容を語る機会を積極的につくることで、リフレクションの特徴を把握し、体験からの学修が深まるよう指導していこうことができると指摘している。さらに実習に先立つ学内演習では、看護技術の安全、安楽、自立、直接目的に照らしたポイントと意味を押さえながら、対象者へ実施するイメージを抱かせると同時に、個人、グループ、クラス単位のリフレクション能力の育成に努めることが必要であるとの示唆を得ており、今後の教育実践への貢献が期待できる。

審査委員会では、研究の用語の概念規定をわかりやすくすること、テーマと研究目的結果に一貫性をもたせること、2つのリフレクションのつながりおよび研究結果の看護教育への貢献に関して明確に記述することについて修正の指摘があり、その修正を経て、本論文が博士（看護学）の学位に相当するとの結論を得た。